

rififi

53



目次

連載第4回		
眼鏡越しの空	- 1 -	しもこし
テーマ競作『凍る』		
魔十楼	- 53 -	霜越邦彦
過去の明日	- 65 -	橋本さかえ
眠れる惑星の美女	- 76 -	白坂 匡
凍った月	- 87 -	吉村千夜
フユのかけら	- 99 -	砂塔悠希
連載第2回		
幻想詩人	- 110 -	橋本さかえ
連載第1回		
あした、桜の下で	- 154 -	吉村千夜
編集後記	- 212 -	

眼鏡越しの空

しもじし

木原智美：主人公。高校二年生。眼鏡をかけた女の子。

1

大石光輔：主人公の同級生。バスケット部。

木原利通：智美に干渉したがる、できのよい弟。

田端 ……主人公の学校の写真部部长。

倉下桃子：主人公の同級生。友達。

前号、あらすじ

大石光輔がインターハイ出場をかけた試合で、彼の活

躍のもと勝利した。智美は彼のことをかっこいいな、と

思っ反面、なぜか素直によろこべない。試合終了後、倉

下が、大石に「智美が好きだって」というと、大石は「ぼ

くも」と答えた。智美は呆気にとられる。

夢を見ていた。その夢で、智美はカメラマンをしてい

た。おそらく、スポーツ紙がフリーのカメラマンという

ところだろう。そこは、国立の体育館のようだった。智

美は一眼レフのカメラを首にかけ、颯爽と体育館を駆け

回り写真を撮っていた。

撮っているのは、バスケの試合の写真だ。そこで試合をしているのは大石光輔である。プロ・リーグの試合という設定らしい。どうやら、これに勝ったら「優勝」という試合のようだった。場内はかなり盛り上がっていた。得点は、1点差で大石のチームが負けており、残り時間もほとんど残っていないかった。

大石はボールを持ち、相手チームの背の高い黒人四人

にマークされていた。離れたところに味方の四人がいたが、敵一人に押さえられており、あてにはならなかった。

智美が、頼りにならない味方だ、と思うと、次の瞬間から、その味方四人全員の顔が、ボンツという音とともに「タコ」と書かれた顔に変わってしまった。もう、試合

終了、というとき、大石は隙をついてドリブルでマークを突破した。その瞬間から相手チーム選手の顔もボンツ

と全て「タコ」になってしまった。大石は、バスケットゴールより大分離れたところからジャンプする。それにも拘わらず、大石の体は充分とゴールに届いた。思い切りボールをゴールへとたたき込む。

それと同時に終了のホイッスルが鳴った。

大石のチームの優勝だ。

智美は、しっかりとその瞬間をカメラに収めていた。

智美はコートに近付く。コートの中では大石が胴上げされており、智美は、それも間近でカメラに収めた。

胴上げが終わった後、大石は智美に気付いて、近寄っ

て来た。そして、智美の名前を呼びながら智美を抱き締めた。どこか遠くでアナウンサーらしき人の声がしてい

る。耳を澄ましてそれを聞いてみると、その内容は大石と智美についてだった。二人のことを視聴者に解説して

いるのだ。大石については、その年の最優秀選手賞を受賞したと報じている。智美のことは、大石の婚約者で、プロのカメラマンだと言っている。さらに、最近ピュリツアー賞を受賞している、とも付け加えていた。

智美は幸せを感じていた。大石の活躍や大石と婚約しているという設定である(ことに)。また、それだけでなく、自分の活躍にも満足していた。

色々なことに充実を感じている。

智美は、いつの間にかポロポロとたくさん涙を流していた。もちろん「幸せ涙」であるのだが、それにしても異常な程の涙の量だった。

（ちよつと、いくらなんでも流れ過ぎよ。何で止まらな
いの。こねじや、まるで滝じゃない）

そして、その涙が本当に滝になってしまったところで

目が覚めた。

目が覚めてみると、目の周りが涙で濡れていた。どう

やら本当に泣いていたらしい。辺りを見回してみると、そこはいつもの自分の部屋だった。

夢を思いおこしてみる。大石の活躍は見事なものだっ

たと感心したが、その他のことを思い出して恥ずかしく

なつた。自分が、

プロのカメラマン。

大石の婚約者。

ピュリツァー賞の受賞者。

だという。智美は我ながら本当にずっずっしい夢だと

思った。機械音痴で、ろくにまともな写真も撮れないの

にプロのカメラマンだなんて。ピュリツァー賞を受賞し

ただなんて。

(とこころで・・・どんな人が受賞する賞だったっけ)

知りもしないくせに、受賞だなんて、いい加減にもほ

どがある。大石は将来そのくらいの人になりそうなので

よいが、自分の方は現実ととんでもない差がある。随分

と不釣り合いな婚約者だ。智美は冴えない本当の自分を

思うと、泣けて仕方なかった。

時計は、まだだいぶ早い時刻を指していたが、もうじきアラームが鳴るところだった。智美は眼鏡をかけて起き上がり、顔を洗いに行く。

智美が早い時間に起きたのには理由があった。今日は、バスケの試合があった日から、一週間程過ぎた日曜日である。実は、今日、智美は大石と出掛ける予定なのである。そうになりたいきさつは、バスケの試合後にあつたこ

とを説明する必要がある。

試合はまだ終わったばかり。智美が体育館の一階に降りると、そこで智美のことを待っている大石がいた。まだユニフォーム姿だ。

「あの大石君、さっきの『ぼくも』ってどいつの？」

「そのまんまさ、そいついついことなんだ。・・・実は最初

から考えていたんだ、今日、インターハイ出場が決まったら、言おうって。・・・木原さんのこと、好きなんだ。ぼくと付き合ってくれないか」

智美は自分の耳を疑った。それは夢ではなかった。あのカッコ良くて色々と人気者である大石が、智美に告白しているのである。智美の基準で考えれば、逆こそあれ、大石からなどととはとても考えられなかった。

「そ、それって、ほ、ほんきななの」

「え、そうだけど、何か、変だったかな」

智美は思い切り首を横に振った。

「ぼくのこと、嫌い」語尾が上がる。質問だ。

智美は再び思い切り首を横に振った。

「付き合いたくない理由がある、とか」

智美は二たび思い切り首を横に振った。

「だめ、かな」

智美は四たび思い切り切り首を横に振った。しかし、振ってから何に対して振ったのかに気付いた。

(あ……はずみで……)

しかし、既に遅かった。大石は、ありがとう、と言って智美の手を取っていた。

「やっつたーっ」と言っていて大喜びしている。

気が付いたときには、もう手の付けようがなかった。

「え、あの、ちょっと」

と言っている智美に気付かず、

「じゃ、表彰あるからちょっと待っていて」

と言っ行ってしまった。

智美は自分に尋ねてみる。

（「嫌」かな）と。しかし、（そんなことはないんだよ

なあ。むしろその逆だよなあ。いくら考えても断る理由など、どこにも見当たらなかった。

智美が顔を洗っていると、弟の利通が歩いてきた。ジャマがわりのTシャツ、ショートパンツ姿で、眠そうに目をこすっている。トイレに起きたようだ。利通は智美に気付いて声をかけてきた。

「あれ、もう起きたの。早過ぎるんじゃないの。出かけるまでに、まだ、二時間あるよ」

「あ、うん、お弁当作るから」

「え、姉ちゃんが・・・」

「ちゃんと、トシの分も作るよ」

「・・・大丈夫なの」

「失礼ね。味のことなら心配しないの」

「味じゃないよ……天気」

「トシ、あんた喧嘩売ってんの」

「う、姉ちゃん……怖すぎ」

利通はようをたすと自分の部屋へ戻って行った。もう

一眠りするのだろう。実は、今日は大石と二人きりではない。利通も一緒なのである。

試合のあった土曜日のあと、明けて月曜日。その日の放課後までには、大石を知る者の間で、大石にカノジョができた、という噂が広まっていた。

大石は、きっと、今年のインターハイで活躍し、校内でも、校外のバスケットファンの間でもスーパースターになるのではないだろうか。今でも「校内では有名」であるが、一人残らず知っている、というわけでもない。しか

し、いずれ、バスケファンや大石ファンでなくても、彼を知るようになるだろう。智美は、今だったから、それほど大騒ぎにはならなかった、と胸を撫で下ろした。しかし、それでもクラスの中では、しばらく冷やかしが続いたということは言っまでもない。

利通も月曜日にはそれを耳にしていた。クラスメイトにバスケ部員がいて、

『木原……っていひらしいぜ。……お前、
上の姉ちゃんいたよな。お前の姉ちゃんじゃないの』

それで、知つたらしい。その日の夜は大変だった。利
通は不満気に智美に色々と質問してきた。利通は何かと
智美に干渉したがる。どうも土曜の夜から日曜を挟んだ
月曜の朝まで、智美の口からその事実を教えてもらえな
かったことに不満があるようだった。しかし、智美にし

てみると、利通の干渉はただ煩わしいだけなので、そういうことを自分から利通に言うようなことはしない。それが智美にとっての当然だった。

それから数日後の昼休み、校内で大石と利通が立話しているのを見掛けた。智美はもちろん驚いた。後で利通にいきさつを訊くと、最初は、食堂で会ったのだという。

利通は同じクラスのバスケット部員と一緒にだったため、智美

の弟だと紹介されたのだという。智美は何か余計な事を
言っていたりはしないかと気がきでない。

「で、何を話したの」

「気になんの」

「あたり前でしょ。。。で、何を話したの」

「・・・教えない」

「な、何でよ」

「だって、いつも話しかける俺を邪険にしてるじゃん。

こんなときだけ都合が良すぎ」

(うう……仕返しのもりか)

「わかった、わかった。今度からちゃんと聞くから……

で、何を話したの」

「……ちょっと疑わしいけど、まあ、いいや……

釣りの話をしてたんだよ」

『釣り』

「そう」

利通は釣り好きである。自分の棹やら色々と道具を持っている。智美は大石が持っていた雑誌を思い出した。

(そう言えば、釣り雑誌を見てた時もあったな)

智美は釣りには全く興味がない。どこが面白いのか、

さっぱりわからない。しかし、大石が釣りに興味あるの

かと思つて、釣りが格好いいことのように思えてきた。

「大石先輩が釣りやるの知らなかったの」

「そんなことないよ」

しかし、直接本人からは、まだ聞いたことがない。大

石はバスケの練習で帰りが遅いし、冷やかされるのが嫌

で教室でもほとんど話していないのだ。休みの日も、試

合のあつた次の日の日曜日にとちよつと会つて話したくら

いだ。バスケ部は、よく日曜日にも練習しているので、
まだ二人で出かけたこともなければ、色々、趣味などの
話もろくにしていない。

(うーん、付合ってるという実感が無いなあ)

「で、話が弾んじゃってさ、次の日曜は練習ないって
いうんで、行くことになったから……釣り……大石
先輩と、ブラックバスを釣りに」

智美は目が点になった。

「……は、釣りに行くって、何でトシと大石君が二人で出かけるわけ。……わたしだってまだ二人で出かけたことないのに」

そこで、利通は少し言いにくそうに言った。

「だからさあ、二人じゃないわけよ」

「ん、ん、ん」

「……しまじ」

『』しまじ

「……姉ちゃんも一緒なの」

智美は驚いた。

「ええっ、ちよつと勝手な。何でわたしが釣りに」

「じゃ、俺と大石先輩の二人で行くよ」

「それは、だめ」

「じゃ、一緒に行こう」

「何で初デートに、あんたが一緒なの」

「じゃ、姉ちゃん、来なくていい」

「それは、だめ」

「じゃ、一緒に行こう」

「何でわたしが釣りに」

「じゃ、俺と大石先輩の二人で行くよ」

「それは、だめ」

「じゃ、一緒に行いっし」

「うー、これじゃ、埒あかん」智美は大きく溜め息を

ついた。「わかった。行く。行けばいいんでしょ。・・・」

それにしても、何かが違ってるような気がするなあ。・・・

うーん、どこだろう。何か、はめられた気がするんだけど

ど、気のせいかなあ」

「まあ、気にしない、気にしない」

合点がいかないが、とりあえず納得することにした。

「……で、海行くの」

「んなわけない。ブラックバスは淡水魚」

「じゃ、川へ行くの」

「それも違う」

「……何で違うの。釣り堀なの。まさか、水族館と

か魚屋つて言うんじゃないよね」

「んなわけねえ。．．．湖．．．み、ず、う、み」

それを聞いて、智美はキョトンとした。魚がいる場所として「湖」だけすっかり忘れていたのだ。

「．．．あ、そうか」

智美は作ったお弁当をバッグに入れ、それを肩にかけ

た。デジカメは置いて行こうか悩んだが、持つて行くことにした。悩んだ理由は、写真部の部長、田端にある。

試合があつた日、田端は智美が撮つた写真を、あとで見せてほしい、と言つていた。智美は、自分の撮つた物が感想を貰えるほどの代物とは思えなかつたので、しばらく放つて置いたのだが、大石が「ものは試し」というので、見てもらうことにしたのだった。

写真を選び、利通に手伝ってもらいながらそれらをフロッピーに入れた。

写真部は専用の部室を持っていなかった。顧問の先生が理科の先生なので、理科室と理科準備室を部室がわりにしていた。智美は放課後、恐る恐る理科準備室の扉を開けた。中には、一眼レフカメラの手入れをしている上

級生らしき女子がいた。彼女は、智美に気付いた。

「あ、何か、用」

ぶっきらぼうな言い方だった。智美は少しひるむ。

「はい、田端先輩、いらっしゃいますか」

すると、彼女は、

「ふうん」「そう言い、ニッコリ笑ってから隣の理科室

を指差した。「田端は、隣の部屋。今、呼ぶね」

そんなに悪い人ではないようだ。

間もなく田端はやってきて、智美を見ると軽く手をあげて見せた。相変わらず頭はボサツとしている。

「タバツチ」さっきの女子が田端に向かって言った。

田端はそういつあだならしい。「。」「いつのまに女の子の友達作つたの」「その言葉は、少し毒気を含んでいた。

「あ、いや、そういつわけじゃない」

彼女は今度は智美に向かって言う。

「あたしは、三神。三年で副部長。よろしく」

「は……はあ。わたしは、一年の木原です」

「田端は浮気症だから、惚れちゃだめだよ」

「おいおい、みっちゃんが言つとジャレにならんから

やめてくれ」と田端。

智美はフロッピーを取り出すと、先日のバスケの写真

であることを田端に伝えた。田端は理科室の方にいる一年の男子生徒を呼び、その彼に準備室に置いてあるパソコンを使わせ、智美の写真を読み出させた。

田端は、一枚一枚丁寧に見ていく。

最後の一枚は特に念入りに見ていた。それは、大石が、

最後に決めたるポイントシュートの写真だった。写した角度が良かったせいか、大石が決めたのが、よくわかる

よっぴになっただ。

「これ、いいね。コンパクト・デジカメで取った写真のコンテストとかあるから、出してみたら」

「え、ほんとですか」

「うん、なかなかいいよ」

智美は気分を良くして写真部を後にした。少し行ってから、ふと思い出した。田端は、試合のあった同じ

日に智美の写真を撮っており、それをくれると言っていた。智美は回れ右して写真部に戻る。準備室の方には誰もいなかった。理科室の方にみんな行っているのか、そちらから声が聞こえてくる。理科室との連絡ドアの所まで来ると、何を話しているのかがわかった。どうも智美のことを話しているようだった。三神が田端に話しかけていた。

「彼女、どっついっ娘なの」

「え、木原さんのこと」

「そう」

「彼女がバスケット部のスター大石のカノジョだよ」

三神はちよつとの間、言葉を失っていた。

「……えっ、あの娘が。思ってたよりずいぶん普通

の娘なんだ。もっと目立つ娘だと思ってた」

「ああ、俺も最初間違えた。大石が『好きな娘』がい
るって遠くから指差したんだけど、てっきり隣にいた娘
だと思ってさ、その娘に声かけちゃって。恥ずかしかつ

た。．．．でも、彼女．．．木原さん、いい表情するとき
があるんだ。．．．大石はそこを気にいつてるんじゃない
かな。彼女、被写体として悪くない」

「ふうん。あたしにはよくわからんわ。．．．そっついえ

ば、ちぎ、あんなにと言っちゃって、よかったの。」

『あんなにと』って、

『なかなかいいね』って言ったじゃない。確かに良い

には良いけど、すっごく普通だったじゃない。ああいう

47

言い方しちゃうと、『あたしって凄いのかしら』なんて勘

違いしちゃうよ。あなた、部長になってから、他人の写

真を素直に褒められるようになったのはいいけど、ちょ

っと褒めすぎじゃない。あんたの悪い所だね」

「そうかな。勘違いするかなあ。『遊びで撮った写真として、いい』とは、思わないかな」

「ほら、やっぱり、これだ。人のを評価するときって、もっと、勘違いないようにちゃんと細かく言った方がいいよ。タバッチ、本気で相手のこと考えてない。自分本位のところは、変わんないよね」

「うーん。みっちゃんに言われると、辛い」

智美はそこまで聞いてそつと部屋を出て行った。教室

に戻ると自分の席に座り、上半身を前に倒して机に体を預けた。腕を枕にして目を閉じる。辺りには誰もいない。

しばらくすると、倉下桃子がやってきた。

「あれ、トモ、何してんの」

智美は気怠そつに体を起こし、何も言わずに机からメ

毛用紙を取り出した。一枚とって何やら書き出す。

それには、「ただ今、へ「み中」と書かれていた。

智美は再び横になり目を閉じる。

倉下は、「一つ溜め息をつき、よしよし、そう言って智

美の背中をポンポンとたたいた。

「姉ちゃん、もう出るよ」

玄関の方から利通の声が聞こえてくる。

「うーん、今行く」

デジカメをバッグに押し込むと、玄関へと向かった。

△▽△▽△▽

テーパー競争

『蝶の舞』



テーマ競作『凍る』

魔^ま十^{てん}楼^{ろう}

霜越邦彦

53

三、凍る

最近、不思議な事件が起きている。二〇二〇半年で、急激

に冷却されたと思われる、男性の変死事件が続いていた。警察は何の手懸りも掴めていないらしい。榊はその朝の二ユースを見終わると、鞆を持って玄関へと向かった。

その後を妻がついてくる。出かけるとき、妻はいつも榊に抱きついてくる。結婚して大分経つのに、いまだにベタベタするのが好きだ。榊は内心疎ましく思っている。

新婚時は嬉しかったが、いつまでも続けば鬱陶しい。嫌

気がさす。

会社帰りにバーに寄るようになった。何軒か試しに入り、行き付けになった店がある。ふらつと入った裏道にある店「魔十楼」である。その店には村山というマスタ―とママという若い女性が働いていた。彼女は村山の姪だという。

「あ、榊さん、いらっしやい。いいんですか、あんま

り毎日だと奥さん悲しみますよ」

彼女は営業的でない自然な笑みを見せる。榊はそれが
気に入っている。

「ああ、構わない。一緒にいると鬱陶しくて」

榊は彼女とよく話すようになった。マスターに注意さ

れるまで話し込むこともある。ママはさっぱりした性格

で、恋愛感にしても変に夢見がちなところはなく、男を

拘束する風でもなかった。

…こんな娘がいいんだよな…

一緒にいたいときだけ一緒にいられたらそれでいい。

この娘とならそういつ関係になれそうだな。…ママも自分

に気がある…、彼女と話して、榊はそう思った。彼女と

は、多少の罪悪感を感じながらも、次第にプライベートでも会うようになっていった。

そんなある日、仕事中、ママから携帯に電話がかかっ
てきた。今日は自分は休みだから、うちに来ないか、と
いう誘いだった。彼女が住む一人暮らしのマンションの
住所を聞く。柗は少し迷いながらも行くことに決めた。
…いいのだろうか…

歩きながらも迷っていた。ふと、妻の顔が浮かぶ。駅
前の大画面モニターではニュースを流していた。その二

ユースでは、例の謎の凍死事件のことを言っていた。

マムのマンションに着くとシャワーを借りた。お湯を

出そうとしたが、出てきたのは水だった。それもかなり

冷たい。凍死でもさせたいのかと思わせるほどだ。故障

なのか、なかなか温かくならなかった。妻ならこういう

失敗はしないな、と榊は思った。∴凍死といえば∴。榊

は例の変死事件を思い出した。ある日、突然凍死体で発

見されるらしい。何の脈絡もなく、突然亡くなるのだ。

…いや、あの事件でなくても、人なんていつ死ぬかわからない…。そう思う…。もし、このまま帰らなかったら、

きつと妻は悲しむのだろうな…。妻の悲しむ顔が浮かんだ。水はやつとお湯に変わってきた。体を流しながら妻

のことを考える。昔、妻から聞いた話を思い出した。親しい友人を事故で亡くしたことがあると言っていた。い

つまでもべたべたするのは、「親しい人が、突然いなくなる」「そういついふことに敏感になっているせいかもしれない。

…いつも、これが最後かもしれない。そう思って過しているのだろうか…。今のままの生活を続ければ、妻とは別れることになるだろう。二度と会えなくなる日がく

る。…それは嫌だな…。シャワーは、今度は次第に熱くなり、熱湯のようになってしまった。たまらず止めて外

へ出る。…調子が悪いなら、言ってくれればいいのに…。

脱衣所で鏡を見ながら思う。

…帰ろうか…

夫婦の間にも、一期一会のような気持ちが必要かもし
れない。 柗は服を着ると、ママに謝り、家路についた。

ママはリビングのソファに腰かけ、雑誌を開いて見て

いる。隣の部屋からマスターの村山が出てきた。不機嫌そうに見える。

「まむ魔夢、今回は失敗だったな」

村山の方は見ず、視線を雑誌のまま口を開く。

* * * * *

「まあ、いいわ。』心の温度になるシャワー』か…。』お

湯』になったら面白くないわね。やっぱり、いきなり絶対零度で凍ってくれないと。…このアイテム使った遊び

も、何だか飽きちゃったな。また他の遊び考えよ」

「しかし、あいつもうまく凍ると思ってたんだがな」

「あら、わたしは失敗すると思ってたわ」村山は不思議

そうにママを見た。ママは視線を村山に移す。「だって、奥さんのこと愛してるって、わかってたもん」

村山は呆れた表情になり、「フン」と言っただけでママの横に腰を下ろした。

テーマ競作「凍る」

過去の明日

橋口 さかえ

65

その人はまるでこれから大笑いをする様に、口を開け

聞いたことがないような声で喘いだ。胸元に虫でも這っているかと思うようなしぐさで掴むと後ろに仰け反った。

私達はその光景を決して忘れないだろう。まるで、ス

ローモーションでまわる画像を見るようにたった三十秒

ほどのその人の最後を覚えている。新しい商品がやっと

世にでまわり、なかなかの売れ行きで今日ぐらいパツと

やるごとく居酒屋で集まった。盛り上がりもピークに達し

て、いつもの飲み会に変わる頃の事だった。私達はその人を尊敬していた。雨にも負けずを人に変えたようなその人は、声を荒げることもなく、部下の失敗には黙って対処し、声を掛けるタイミングを間違えることなく、人を育ててる人だった。誰一人、その人を悪く言う人はなく、仕事が終われば愛妻の待つ家に真直ぐ帰り、不摂生という生活を知らない人だった。

その人が、人のいう非業の死を迎えた時、私達はただ凍りついたように、動くことなく、いや、動くこともできず、その様子を見ていた。

その後のことは、はっきり覚えていない。

集団で乗り込んだ居酒屋は騒然となり、店の店員と同時席していた半数が思い付いたように、電話で救急車を呼

んだ。私は、貧血をおこしながら、なぜか、その人に水を飲ませようと頑張っていた。数人の女の子はただ糸が切れた人形のように集まって涙を流しながら、座り込んでいた。救急車に乗ったところまで覚えている。あんなに電話したのに来たのは一台だと、ぼんやり考えていた。

その人はもうすでに命なく さよならという言葉を残さず、私達の世界を去っていった。

それから今のまでの時間、何をしてきたのか私はほとんど覚えて、いない。私達の前には、その人が愛した妻が青い顔をして座っていた。かいがいしく動く近所の人

が、お茶を運んでいるのを私たちは手伝う。着慣れない黒い礼服は出来れば着たくない一着だった。私はこの黒が似合わない。葬儀は内々にひっそりと行われた。その

人が死んでしまつてからもう五日になる。

死因は毒死。殺害の可能性があると、警察は私達に言

つた。あり得ない事実。決してそんな死を迎える人では

なかった。こそこそと誰かが目配せをして話している。

その姿がむかついた。首を振り、ハンカチで目頭を押さ

える人の姿が悲しかった。

「あんたたち、少し休みなさい」

そう声を掛けてくれたのは、その人のお姉さんで、真つ赤になつた目はその人と同じように静かだつた。誰もこない応接間で私達はその人が愛した人と遠いざわめきを聞いていた。

「主人がお世話になつたのに…。私、きちんとお礼もいえなくて…」

私達の挨拶にその人の愛した人は落ち着いた声で話した。品のある横顔をそつと外し、ハンカチで目頭を押さえた姿は痛々しく、私達はまた涙を流した。ああ、帰ってこないその人を忘れられないということは、なんて悲しいのだろう。その人は死んでしまった。

「警察は犯罪の可能性があるって、犯人を捕まえるために協力して下さいっていろいろのよ。…、でもね、私を知り

たいのは、誰が主人を殺したのかじゃないの。……。あ
のね、正直に答えてくれるかしら。皆主人はいい人だっ
たつて、言つての。殺されるような人じゃないつて。自殺
をするような動機もないつて。はあ。……。でももし殺
されたのなら、どうして殺されたの。主人は何をしたの
か、お願い、教えて」

私達はただ号泣し、それに答えることができなかった。

私達は知らない。その人はただただいい人だったから。

その人の愛した人は黙って窓の外に散る白い花をながめるように視線をそらした。明日くる過去の疑問を、その為に更に心痛めることを知っているように。

終わり

テーマ競作「凍る」

眠れる惑星ほしの美女

白坂
匡

「ねえ、おじいちゃん。この惑星青白く光ってきれいだねえ。」

「この惑星は凍っているんじや。」

「え〜！ 惑星って凍るのお……。ねえ、どじして凍っているの？」

「大昔に神の怒りがあったと言われているよ。」

「ズレてくたえ?」

「この惑星の人間が傲慢であつたからと言われている。」

「ゴウマンってなあに?」

「自分が偉いとしても思い上がることを。そして、自分がすべきでない神のやることまでやることを許すことだよ。」

「なんか、隣のテーブルで変なこと言ってるじじいがいるなあ。子供に教訓じみたことを教える為に、何も嘘教えなくたっていいのになあ……。」

「でも、さっきの流星群をよけるのに方向転換しすぎて燃料が足りないんだよ。この惑星で補給できないのか？ 星図には、補給可って書いてあるぞ。」

「確かに補給できないこともないし、もしかしたら無料ただ

かもしれないけど、この惑星はだめだよ。ここが凍りついているのは、確かなんだから。一心、伝説の惑星だといつのも本当だそうだし……。」。

「伝説？ ああじじいの話が嘘だとしたら、いったい伝説の惑星の伝説ってなんなんだよ。」

「数千年前に惑星ごと凍らせられる技術を発明して、惑

コールドスリープ

星ごと冬眠してしまっただけ……。」。

「惑星ごと……。なんでまた……。」

「なんでも、お姫様にふさわしい王子様がいなかったからとか……。」

「え〜！ 大体、そんな高慢なお姫様なんか起こしに、誰か来たりするのかわ？」

「来るらしいよ。この惑星は資源は豊富だし、科学は進んでいるし、逆玉狙いの自薦いい男達や科学者や使命感

に燃えた馬鹿や単なるミーハー男達が。」

「じゃあ、呪いならぬ冬眠をとける奴がいなくて、今もそのままなのか？」

「いいや。なんでもいい男センサーとかがあって、ある程度いい男が着陸すると、惑星ごと目を覚まして歓迎してくれるらしい。」

「へえ、便利だね。でも、何でまだ凍っているんだ？」

「お姫様のお目にながう奴でないと、また眠ってしまおうらしい。」

「着陸してみたいなあ。さぞ、綺麗なんだろうなあ。」

「さあ。」

「さあつて……。だつて着陸したんだから、誰かそのお姫様の顔見てるんだろう?」

「いや、帰つて来た奴の記憶から、お姫様のことだけが

消えているそうだな。」

「なるほど。すごいどブスかもしれないわけだ。」

「そういうこと。補給とかで立ち寄って、万が一センサ

ーが反応して起きちゃって、気に入られたら大変だろ？

だから、最近影の要注意惑星指定になっていて、誰も

来ないらしい。触らぬ神に祟りなし。数千年もすると、

さっきのじじいの話みたいのが本当に残るかもね。」

ほし

スペースポート

その惑星には、広大な宇宙港つきのお城と、王様とお姫様と、ちゃんと綺麗でやさしいお姫様と、その家来や召使や民がおり、すべてが眠っております。

ただ、お姫様には理想の高すぎる口うるさいばあやがついていました。とね。

（教訓）人の話は、鵜呑みにせず、参考程度にしましょう。

お姫様もね。

テーマ競作『凍る』

凍った月

吉村千夜

月を見ると心が洗われるみたい、と朋子が言っていたのはいつの頃だったろう。もうずっと昔、三人でよくアパートの窓から見ていた月。何かと集まっては飲んだり食べたり、べろんべろんに酔って見たときもあれば、悔しさで泣きながら見たこともある。いつのときにも、真剣で・・・生きていることそのものが楽しかった。

楽しかった、なんて、過去形で言ってしまうのは哀し

い。けれど、少なくとも朋子にとってはそれは過去形なのだろうかと、どんな時にも彼女の瞳で知らされる。

「いつも有難うね。ほんとに、感謝してるのよ」

朋子のお母さんが涙目で私たちに言う。いつも、いつも

も・・・癒されないのは、誰だろう。誰一人、幸せな顔が出来ない。彼女の部屋を訪れ、疲れ切つて帰る道、遠

い遠い真つ暗な空に浮かぶのはあの日の月と何が違つこと
言つのだろつ。

「いつまで・・・かかるのかな」

「いつも、思つよ。今度でもつ止めようかって。私たち

が行くことに何の意味があるのか、わからなくなること
があるの。」

普段は温厚な美雪がまるでうんざりしたように言っ
つのが、私は怖くなる。いつもならすぐに怒ったり泣いたり、

一番感情が激しいのは私なのに。朋子と美雪は温和な夕
イプだから、笑って私をなだめてくれた。いつも、私を
支えてくれた。

朋子の婚約者がどんな目に遭ったのか、私たちには新

聞やニュースで聞いたことしかわからない。馬鹿な若者に刺された。犯人はすぐに捕まった。朋子は動かなかつた。それっきり、扉を閉じて、開かなくなつた。

どうして、この世界はおかしくなつてしまつたのか。

私たちが二人で月を見上げていたころ、私たちにとって世界は優しかつた筈だ。あれからほんの数年だ。私たち

は気楽な学生ではなくなり、働いて責任を持つようになつた。それでも世界が私たちを憎んでいると思つことはなかつた。

三人で集まる回数も減つたけれど、何とか都合をつけ

て会える時が本当に楽しかつた。それなりにうまくやつ

ていたのだ。誰もがそうであるように、それぞれの人生に折り合いをつけながら。

そうやって、きつと誰もが年を取ってゆく。結婚し、

子供を産み、育て、そんな当たり前の幸せは普通に与えられるものだと思っていた。

それが間違っていたのか・・・誰が想像するだろう。

この苦しみを味わうのが、どうして彼女でなければならなかったのか、もしかしたらそれは私だったかも知れな

い、知らない誰かだったかも知れない。まるでゲームの駒のように勝手に選ばれた。

日々のニュースは新しくなるだけで、どんどん忘れ去られていく。でも私たちは知ってしまった。これらの苦しみは更新され続ける。

逮捕のニュース、公判、判決、事件の起こった日（ア

ニバーサリー症候群と言っただけ、いろんなきつかけで記憶が掘り返される。それらが色あせる時間がない。

少しずつ、暗闇に追いやっていったと思える度に光が当たる。また鮮やかな色の記憶と向き合わなければならぬ。

出来ることならその全てから、彼女を守っていききたい。

と思うのは・・・不可能なのだろうか。

凍りついた心は、溶ける時間を与えられない。

憤りだけが募ってゆく。私をほっといて、と思うのは

当然だ。そして私たちも・・・もしも、私たちが訪れる

度に、それらが更新されているのだとしたら・・・どん

なにか耐えられないことだろうか。

そう思いながら、帰る足取りは重いままだ。

けれど、望みを捨ててられないから、私たちは訪れ続けるのだらう。何がいいことなのか、その答えが出る日まで。

テーマ競作『凍る』

フユのかけら

　　フユが来るまえに　　2　　

砂塔悠希

雪は止むことなく降りつづけ、辺りを一面の雪野原に

変えてゆく。町を、人を、あらゆるものを白く染めてゆく。音すらも白く染め上げて……。

「白、白、白……」

窓の外を眺めながら、アンディはつぶやいてみた。部屋の中には小さなダルマストーブ。ところどころ傷んで隙

間風が入ってくる木造の、この小さな小屋を暖めるのに十分とはいえないが、窓の中で踊る炎がかじかんだ心を

溶かしてゆく。

「はいよ、お客さん」

小屋の主人がブリキのマグに熱いコーヒーを注いでくれた。濃いローストのコーヒーにシングルモルトを豪快に加える即席アイリッシュコーヒは、じんわりと内側から体を温める。マグの暖かさを指先に感じながら再び窓の外を眺める。凍てついた大地には見るものもなく

ただ荒涼として……。

「いったい、いつまで居座る気ですかね？　今年のフユ

は」

例年になく長い寒波の影響で、もう何日も太陽の光を

拝んではない。どんよりとした厚い雲は隙間なくびっ

しりとこの国を覆っているようだ。

「……フユとは違ひ」

「？」

「フユってなあこんなもんじゃねえ。フユってなあ……」

小屋の主人は何かに怯えるように体を震わすと、それきり口を閉ざした。深い色の瞳がストーブの小窓で踊るオレンジを見つめ、主人の顔を照らす炎が、深い年輪を刻まれた主人の陰影を濃くして。

やがて、主人は再び口を開くとポツリと彼に尋ねた。

「あんたらの世代じゃあ本当のフユってもんを知らねえのも無理はねえがな……あんた、この町の外へ行つたことがありなさるかい？」

「この、町の、外？」

彼はこの町で育つた。この町以外に町があることを情報として知ってはいたが、この町を出たこともなければ出ようと思つたこともなかった。けれど……。

「昔はフユも3月もすればいなくなるもんだつたがな」
深いため息とともに小屋の主人の口から吐き出される
言葉。

「あんどきゃあひどかった。1ト月も早くやってきやが
って、みんな冬籠りも間に合わなくてなあ」

と、俄かにアンディのうちに蘇る記憶。知っている。
いや、覚えている。

「あれからだ。われわれがこんな地下街に住むようにな
つちまつたのは」

猫だ。

「地上に文明を築くことは、やめた。どんなに一所懸命
に築いてもフユがみんな壊しちまう。たった3月でなあ」

ペギーを置いてきちやっただ。ソファアの下に。

「フユってのはな、いきなりやっできてみんな凍らせち

まっんだ。 なにもかもをな」

ジェフの監視艇は出航できなかった。 ジュリアが泣いていた。

「フユってなあ こんな優しいもんじゃねえ。 ……悪夢だ

よ。 神様の悪い冗談さね」

パパは、帰ってこなかった。

「さ、もう終いだ」

小屋の主人はそう言つと、小屋の明かりを落とした。
のつぺりとした石の壁が不意にアンデイの前に現れる。

こども
少年のころから見慣れた無機質な地下シエルターの壁。

あかり
ホログラムの落とされたパブの真ん中にはレトロなダル
マストーブが相変わらず赤々と火を灯していた。

フユが還らなくなつたのはいつのころからだろうか。空

から突然落ちてくる氷柱から孵った子供は、3月で消えることなく街を破壊し続けながら成長を遂げ、その子供が氷柱を生んだ。世界はフユに覆われて凍りついた。

そして、われわれは地下に潜み、やがて地下に街を作り、待つしかなくなつた。いつか彼らが絶滅する日まで。

幻想詩人
2

橋口 さかえ

* 前回のあらすじ

小さな文具卸しの会社に勤める京子。同僚の美鈴、高木と共に企画課で年末商戦をこなしていた。話題は新人飯島の人の良さと彼氏の良さ。そんな噂をした翌日、飯島が相談を持ちかけてきた。

軽く演歌が流れている店内は、常連の客でいっぱい

なっている。オフィス問屋街を一本入ってすぐ、郵便局が目印のこの店は美鈴のお気に入りだ。何か落ち込むと必ずここに来る。先に見つけたのは私だと京子はいつも思うが、使用頻度は美鈴の方が断然多い。最近が高木も他の同僚もこの店をよく使う。何がいいのか。まず、「お母さん」がいい。気づぶも割腹もいい「おかあさん」はこの店の経営者だ。ハツハと世間を笑い飛ばし、落ち込

んだ美鈴のような客には激を飛ばす。最高の肉じゃがは常連客が必ず小鉢で注文し、カウンターに並んだ惣菜は季節の食材が最高の味付けで盛り付けてある。

のれんをくぐった京子と飯島は「おかあさん」の笑顔で迎えられた。

「あら、京子ちゃん、可愛い子ねえ。後輩かい？」

「そう。」「おかあさん」「いつもの肉じゃかと生中。えっと

飯島さん、何飲む？」

「私もビール」

「はい、ちょっと待っててね。あ、カウンターにするか

い」

「う、いいや。こっちに座る」

「なんだ。プライベートの相談かね。じゃ、奥にきな」

相変わらずさっさっのいい「おかあさん」は奥のテーブル

ルをさっさと片付け、席を作ってくれた。

「おかあさん」「っっち、ビール！」

常連のおやじが「おかあさん」に声を掛ける。

「もう、あんたの分、おわりだよ！飲み過ぎだよ、全く」

「ちよっとお」

飯島はくすくす笑いながら、京子の差し出したメニュー

―を眺めた。

「ああ、ちょっと、うるさいかな」

京子は場違いな場所を選んだかと、顔をしかめた。考えてみれば年末、常連客が何回も忘年会をしているらしい。ここ何年もそうだったことを忘れていた。今日は常連 A と B。その前は常連 B と C というように忘年会を連日していたっけ。

「なんか人情劇場って感じ。ここいらとこ、実在したん

ですんね」

「飯島さん、渋いこというね。まあ、その通りかもね。

「ここね、美鈴のお気に入りなんよ。」おかあさん」に怒られにくるの。変な言い方だけどね。あいつ、結構ナイー

ブなところあってね。いつも、自分のこと茶化してごまかしてるけど、本当はムチャ弱いだよ。すぐ、撃沈してしまうタイプ。で、ここに来て「おかあさん」に喝いれ

てもらひの」

「田中さん、ナイーブで怒られるなら、私もつと怒られますよね」

飯島は困ったように微笑んだ。京子は一瞬顔をしかめたが、何も言わず、メニューを指さした。

「これ、注文しようか。たこ酢。あとお勧めはあさりの酒蒸し」

「京子さん、あの」

「まず、話をするときはアルコールを口にして、リラックスしてから」

「あ、はい。じゃ、私、チーズボール食べたいな。チーズ大好きなんです。京子さんは？」

「私もチーズ好きだな。一番好きなのは、チーズ蒲鉾」

「ああ、コンビニで百円で売ってる。私、あれ、営業中

にとつがらしの入ったの時々食べるんです」

「私も食べてた。あれね。春、桜見ながら食べるとつま
いんだよ」

「プチお花見？」

「うん、プチプチだけだね」

二人は顔を見合わせて笑った。

美鈴は首をポキポキならすと、大きく伸びをした。さて、今日の仕事は終わり。なんか疲れたな。一人暮らしの寒い部屋に帰るのが何となく寂しい。実家に年末帰るまであと2週間ある。コンビニでお弁当はなんか嫌な気分。

「おかあさん」に会いにいこうかな……」

ぼそつと呟くとそれが最善の方法に思えた。京子は今

日はそうそうに帰ったし、一人で行ける店は簡単に思い付かなかったのもある。

「うわー。なんか肩こるー」

企画室のドアを蹴飛ばす勢いで高木が入ってきた。

「あれ、何。美鈴ちゃん、一人なん。京子ちゃんは？」

「あいつ、帰りおつてン。私は、今、終わったとこ。課

長はどっしたの。一緒に出かけたンとちやっただ？」

「いつもの直帰」

「ああ、そう」

高木は営業鞆を下ろすと、椅子にどかっとな腰を下ろした。肩をぐいぐい押す。

「ねえ、美鈴ちゃん、この後、時間空いてるなら、一緒にマッサージ行いっしょよ。こないだんと」

「うーん。私「おかあさん」とい行きたいからな」

「一人で、行くの」

「……。一緒に行くか？」

「そりゃ、行きますっさ。はよ、帰る用意しやあ」

「わかつとるて」

「わかつてるんですけど」

飯島は酒を飲むと口が重くなるタイプだった。京子は

何度も頷き、飯島が本題に入るのを待った。ぽっちやり
おっとりの飯島は、白い顔を赤く染め、食べるか食べな
いのがはつきりしないしぐさで肉じゃかをついついている。
だあ、まどろっこしい！と本心思っている京子はすでに
二杯目の生中を飲み干す寸前だった。

「自分でもわかってるんです。この性格直さないと、人
に流されてしまっつていじや」

「うん、うん。でも、営業の時の飯島さんは、しっかり対応してるし、奥さん方にも好かれてるし、営業実績も伸びてるじゃない。みんな誉めとるんやよ。そんなこと心配しやんでも、大丈夫やて」

「いえ、営業は全然、心配してません。お客さん、みんないい人だし。プライベートなことで困ってるというが、引き受けなきゃよかった、というが」

飯島は一杯目のビールを飲み干した。

「何飲む？ウーロン茶とかにする？」

「ええっと。もう少し飲みたいかなあ。あ、梅酒サワー

にします」

「おかあさん」！梅酒サワーとチュウウハイライム！で何

引き受けたの。何にしても、飯島さんなら、やっぱり無

難に出来るでしょっ？」

「はあ、それが、バイトで……。いかがわしいとは思ってたんですけど、断りきれなくて……」

飯島の言葉尻が消えるのを京子は不安に思った。あか

ん。いかがわしいバイトはあかん！お姉さんは許されへん。何とか説得して断れせなくちゃ。京子は二杯目のビ

ールのグラス越しに飯島を見た。ぱつと見、呑気におつ

とり構えた飯島は、見た通りのお嬢さん育ちだ。今も実

家で親兄妹と仲良く暮らし、何の問題もない日常を過ごしている。と思っていた。その点京子は兄夫婦の同居を切っ掛けに家を出て、波乱万丈ではないが、住民票に世帯主と明記され、ある意味自立している。京子は、悲しくなった。何の問題もない日常生活って、なんだろう。

会社とアパートと彼氏の家のルートが私の中にインプットされた生活だ。

「ああ、飯島さんってある意味、人生充実してるかも。私、そついう変化ってないから、アドバイス自信がない。

もう、それだけは先、言うておくよ。」

「やだ。京子さん。へこまないで下さい。いかがわしいの内容、聞いて下さいよ。あの、月百万のバイトなんですけど。」

「それはいかがわしい、ていつか、うらやましい。」

「私、断ったんです。最初は」

飯島はおかわりの梅酒サワーを口に含み、一息ついた。

「どんな仕事」

「それが、女の子が行きそつなお店に毎日、一緒に行く

って仕事で、今日で一週間目です。この後その人と会う

て、今日も西屋町の「リンクス」に行く予定です」

「それ、じついつちやなんだけど、行くだけ?」

「ええ、大抵しゃべったり、しないんです。ただ、一時
間程行つて帰るだけ。時間の都合もこちらに合わせたく
れるんで、それほど負担はないんです。それだけの為に
百万もくれるなんて。変ですよ。私、お金も払つたこ
とないんです」

京子は飯島の顔を見つめ、黙つてもう冷めてしまった
チーズボールを口に入れた。冷めてしまったそれはなん

とも味気なくただ塩っぱい味だけが後味に残る。ここに
来て、ほぼ四十分。なんのアドバイスも出来ない自分が
少しむかつくし、こんな相談に答えられる奴は絶対いな
いと、思った。確かに、飯島がこれはビジネスだとい
きれば、成立するだろう問題だと思つ。何が悪いことを
しているわけでもない。飯島自身、それに対して実害を
受けているわけではない。京子の中でいかがわしいの定

義が崩れそうになる。たとえば、援助交際。いかがわしいよな。

「んつ。それって新種の援交とか」

「だったら、それはそれで、きつぱり断れます。私が恐いのは、その人、人を探しているみたいなんです。それでもし相手の女性を見つけたしたりして……」

「その女性に何かあったら、怖いね」

「……はい」

やっと飯島の考えていることが京子にわかった。その可能性が有るとしたら、飯島はこのバイトから手をひいたほうがいい。

「どんな人、そのバイト依頼した人って」

「ふつうの人という概念は外した方がいいです。外見だけでなく性格的に。なんて言っかな。空気のように気配が

あまりしない影の薄い人なんです。外見とかなり違います。だいたい一緒に歩いているとすれ違う女の子の大半はその人に視線を向ける程かつこいいタイプ。でも、そのことに彼は気がついていないの。お店に入ってもウエイトレスとか彼にチラチラ視線を向けて。でも、ふつうに注文してそのまま。たぶん、自分の容姿に気がついていないんだと思うんです」

「そんな男、始めて聞いたよ。ふつうそこまでかっこいい奴って、自意識過剰なのに」

飯島は頷く。確かに無気味だ。やっぱりいかがわしいの範疇に入るな。やっぱりお姉さんは許せませんと、京子は思った。ただ、な。

「別にただ興味があつてのことだけなら、どうやって断ろうかと思つて。その人、職業詩人だつて言つてたし」

「……。何って」

「詩人。私、そんな職業が存在するなんて知らないから間に受けてしまつて。詩にする材料探しに百万も払うなんて芸術家つてすごいと思つたんです」

「それで引き受けたのか。詩人つてすごいなと思つて」

「はい、やっぱり、この性格直した方がいいですよな」

「つていつか、もう、おばかさん」

「はい」

飯島は困ったようにグラスを取ると氷の解けかかった梅酒サワーを口に含んだ。

「今日も会つもの？」

「ええ、この後、九時にその駅で待ち合わせてるんです」

「九時か」

あと一時間ほどある。どついたらいいか。京子は悩んだ。

美鈴と高木は「おあかさん」の店のドアを開いた。お

やじの笑い声と「おかあさん」の威勢のいい声に迎えられる。

「遅かったじゃないの！おや、今日は高木君も一緒。最

近仲いいじゃないの」

「もう、誘つ相手がいなかったただけ。あれ、京子じゃん。

飯島さんも」

「何、待ち合わせてたんじゃなかったの。二人ともビ―

ルでいいね」

「うん」

美鈴に気がついた京子が手を振り、飯島が振り向いた

何やら情けない顔をしている。

「何、ちょっとこんなところで後輩虐めてんとちやう」

「ばあか。飯島さん。こっちの隣の席においで。そっち

は美鈴と高木君が並んで座るから」

飯島がくすつと笑って席を立つ。

「何、いつてんの。気持ちわりい」

「そつだよ。俺は飯島さんの隣がいい」

「あんたたちはセットで眺めた方が面白いからね」

「キツ。あたしらはあんたの娯楽か！」

「そっだよ」

がたがた椅子をならして奥に美鈴　その隣に高木が座つ
た。

「はい、ビール。そこにあるの取りあえず、つまみなよ

な。何か他、食べる？」

「もちろん」

「おかあさん」は美鈴と高木の注文を聞くとカウンターに戻った。

「本当に仲いいですね。田中さん、高木さんと付き合い始めてどれくらいなんですか」

飯島が自分のグラスを取りながら聞く。

「えっ！やだ、わたしたちそんなスタディな関係じゃな

いよー！」

「プラトニックでもないし！」

美鈴と高木はあわてた口調でバカなことを口走った。ふたりとも真面目に答えてることが変で京子と飯島は一瞬言葉に詰まり、笑い出した。

「あたし、あんたら二人の子供が見たいよー」

「バカ京子！いい加減なこと言つな！」

「そつだよな！俺がこれから築くべき麗しい家庭を否定するよつな」

「なんやて！高木。私じゃ、麗しい家庭は築けんというのか！」

「当たり前やんか。美鈴ちゃんどじゃ、明るい家族計画になるやんか！」

飯島が腹を抱え、涙を流している。二人が混ざったこと

で、飯島と京子はさっきまで話していた問題に答えを出せないまま時間が過ぎていく。時々チラツと思いついた京子は飯島の様子を見て、飯島は時々時間を気にしていた。

「何、飯島さん。これからデート?」
時計を盗み見た飯島に高木が気がつく。

「ああ、飯島さんの彼氏、かっこいいよな」

美鈴は悪気はない。飯島は一瞬京子を見た。

「うん、この前、美鈴と一緒に歩いていたのを見たンヤ
て」

飯島は首を振り、情け無さそうに違う人です、と答えた
「私の彼、もっと愛らしい人です」

そういって、鞆のポケットを探り、パスケースを出す。

「のびた君や」

三人は声を揃えて言った。そこにはニコニコした飯島と丸顔に丸眼鏡の愛らしいらしいのびた君が写っていた。

二人はこの上なく幸せそうに笑っている。

「ああ、勘違いしてもうたわ。だって並んで歩いていたからさ」

美鈴はしまったという顔をする。高木も何やら気まずい顔をした。

「なら、これから、のびた君とデートなんやね。ごめん
変なこと言つて。私、アルコール入ると口軽くなつてさ
あ。気にしやんでね」

「……。いいんです。私も後ろ暗いところあつたから、
言い淀んでしまつたんです。美鈴さんが見た人、私、確
かに一緒に歩いていました。否定しません」

飯島はそう言つと微かに笑つ。京子は飯島が本当は強い

子なんだと、実感した。性格が弱いわけではない。

「飯島さん。私、この二人には黙つとれへん。さっきの事、話していい。で、三人でどうしたら最善の方法か、

飯島さんにアドバイスする」

「ありがとうございます。私も京子さんにそう頼もうと
思っていたんです」

そう言つて、飯島は席を立つた。鞆から財布を取り出す

「いい、後輩にお金はもらえない。払っとく」

高木がそう言つと飯島は何が言おつとしたが、三人の顔を見渡しにこつとした。

「いぢちそごひまでです」

飯島が店を出て行く。

「いぢちそごひまでです」

京子と美鈴が高木に頭を下げる。

「あんたらは割り勘や。で、飯島さん何話したんや」

3に続く

連載第一回

あした、
桜の下で

吉村千夜

映画の宣伝で、「ほんとうの夫婦のあり方」とか、「究極の恋愛のかたち」とか、ひとつに定義づけられたキャラクターコピ―を見る度に、ゆづきはどうにも突っ込みたくなってしまう。だって恋愛のかたちなんて、それぞれ違うものだから、これが究極だなんて誰にも決められない。

どうしてこんなに安易なコピ―をくつつけるのか。君らそれで納得するんか、などと映画の登場人物にまで突っ

込む始末。

「そういう性格やねんから、しゃあないけどな」

彰介には一言で一蹴されるが。そういう自分はどーなのよ、と心の中でまた突っ込む。こいつがどうも一筋縄ではいかない奴だからな。

初めて小原彰介の名前を名簿で見たときは「なんちゅ

うぶざけた名前や」と思った。そしてつい、口に出してしまった。そしたら隣にいた男子が

「悪かったな。好きでこんな名前ちゃっわ」

と呟いた。高校に進学して、初日目のことだった。

そこから、ゆづきと彰介との付き合いは続いている。

付き合いと言っても、悪友・親友としての腐れ縁だ。そ

こが確かに「微妙」と言えば「微妙」なのだけけれど。

ゆづきはいつも恋をしている。していたい女だと思っ。

一人暮らしをしているからかも知れない。春は一緒に桜

を見たい。夏はまぶしい光の中で楽しく遊びたい。秋の

寂しさを共有したい。冬の冴え冴えとした空気に暖かさ

を感じたい。それは誰かと一緒にいたい。大好きな人と一

緒がいい。

いつも・・・多分・・・たとえ片思いであっても、好きな人がいると幸せだった。いや、それは寧ろ片思いだからだろう。学生の頃にいつも胸を痛めながら、好きな人を目で追っていた、それが一番幸せな時だったのかも知れないなんて、大人になって考える事だから。

だから最近のゆづきはちょっと疲れている。人を好きになるのは勝手だ。でも付き合い始めたら、それは立派

な人との関係だから、独りよがりではいられない。自分の空想どおりにはならない。好きで好きでしようがないから、苦しむこともある。苦しいことが楽しめる人なんて、そうそういるもんじゃない。

そこで悪友たちの登場だ。みんなそれぞれ、似たようなことを感じている。疲れたり、イライラしたり、ストレスはたまる一方。職場の仲間にもいい奴はいる。仲良

しはいる。でも、それでも、昔からの友達たちはちよつと違つのだ。

高校のとき、彰介にはいつもつるんでいる仲間が二人いた。そいつらともゆづきは仲良しになつたけど、でも一対一で会いたいと思つほどにはなれなかつた。

彰介だけは、全く最初から違つた。あまりに気持ち

合つので、私この人に恋したかも知れない……なんて
思いたくなるほどだった。

一週間ほど考えて、やっぱりそれは違つかな、という
結論に達した。ちよーつとそれはちやうんちやうん？ほ
んまにええ奴や、こんなに気の合つ男も初めてや、大好
きや、でも恋ではない。それはきつちり理解できたつも
りだ。何でか、明確な理由は言葉に出来ない。でも、わ

かる。ちやうねん。な？

たまたま、男の子にも親友が出来た。それだけのこと

だ。こんなに仲良しなんだから……それだけで、充分
なのだ。

さあ、けれど、おはらしょーすけさんにとって、うえ
だゆづきさんはどないでっしやる？

わかりまへんな。人の気持ちなんて。

だいぶ日が長くなってきた。道を急ぎながら、ゆづきは空を見上げる。まだまだ寒さは厳しいけれど、五時にはもう暗くなってきた。真冬の頃に比べれば、六時近くても明るさの残る薄曇りの空は、確実に春への一歩を感じさせる。まだ冬の空気たちは、私たちを忘れないでとばかりに頬を突き刺してくるけれど、その中にほんの

少し、暖かさが混じってきた。切なさど、微笑みたくなるような温もりと。心の中の葛藤のように、身体ごと包み込んでくる。

こんな季節の移り変わりのときには、言葉に出来ない切なさど期待が心の中に入り混じる。春という、次の季

節に向けての不安も、そして喜びも、これまでの同じ季節に感じてきた様々な気持ち^が積み重なって、胸の中が

いっぱいになる。

待ち合わせで有名なデパート入り口付近、それでもち

よっと目立つくらい格好いいのが、ゆづきの目指す人。

背が高くくて、ちょっとはかり男前で、ふたつ年下の松島

とは、付き合い始めて二ヶ月くらい。普段から外見は二

の次だと考えているゆづきには珍しい選択だと、よく周

囲に言われる。

そうなのだ、ゆづきの好みときたら、くたびれたヒゲ面のおじさんだったり、どう見ても人の良さだけが取り柄のような目立たない坊主頭だったり、前髪前線が著しく後退した俳優だったり、いつも「この人素敵！」のだ。「めっちゃ好みやわあ」と胸きゅんさせて、或いは彼氏として連れてきたりしては周囲に「またか」と思わせ続けてきたのだ。

この場合、「やっぱりなんやかんや言っても顔かいや」と
やっかみ半分で言われても仕方ない。でも今のゆづきは
松島の顔が好きで好きでどうしようもないから、黙って
笑っておく事になっている。

(ちなみに、おはらしょーすけさんは若くして髪の毛の
悩みを抱えているタイプ。顔はと言えば、ドラマで主人
公の弟とかに出てきそうなふつーのたれ目)

む、どつしてここで彰介を思い出すのか。いかんいかん。

話を元に戻そう。松島は職場の後輩だが、好きと言ってきたのは彼だった。流されやすいゆづきはあっさり承知して現在に至る。

恋愛って、そういうもんなんやろか。時々ゆづきも悩むことがある。映画で見るような大恋愛に、誰だって少

しは憧れるもの。けれど、告白されてその気になって、
今では大好き、なんてどうにも主体性がなと過ぎる。食
わず嫌いの食べ物無理やり食べさせられたら結構美味
しかった、くらいの情けないエピソードで、ドラマにも
なりそうにない。

それでもゆづきは幸せだった。松島はゆづきを見ると、
本当に嬉しそうな顔をする。この笑顔にゆづきは負けた

のだ。

てなわけで、今日の松島も嬉しそうだった。情けなく
緩んでいく自分の顔を意識しながら、ゆづきは松島にく
っついて歩いていく。おかしいなあ、最初は確かに私の
方が優位に立っていたような気がするのに。そんな打算
的な考えも、ちらつと頭を掠めたただけだ。

松島のいい所は、気取らないところだ。外見の割には

真面目で堅実なので、ふたりで行くのはいつも安い居酒屋

屋。こつという顔の男はみんな、薄暗くて雰囲気のあるバ

ーとかでカクテル片手に女を口説くものだと思っていた

ゆづぎには、これまた新鮮で嬉しいことだったりするわ

けだ。

「お疲れ様あ」

と乾杯し、ビールをぐーっと飲んで、ああ、幸せ。ゆづきはこんな自分をおやしな女とはつきり認めている。

しかしながら、向かいに座っている松島も、見た目に反してかなりおやしなので、まあお互い様というところだろうか。

「春闘の回答も出たみたいやね。どーにも不況やなあ」

「うえっ、いきなりその話題、何とかならへんの。あん

たいくつよ?」

「ごういごうと、真剣に考えたらあかんのか。まあええわ、それよりゆづちゃん、週末はどないなったん」

「ああ、大丈夫やわ、空いた空いた。どこ行く? 私

神戸の、前に一度行ったアウトレットモールあるやん、あそこ行きたいわあ」

「あーあそこね。良かったよなあ、海も見えて。行こう

行こう。」

「たまには弁当でも作ったるか。有難いでえ、滅多に出えへん私の愛情弁当」

「ほんま、ほんまに作ってくれんの？ いや、雨降るんちやうやろか」

「ありがたみのないやつちやな。もつええ、作ったらん」
「嘘つぞ。でもゆづちゃん、早起きするとげーったい、

車ん中で寝てまうやんか……それがちよつとなあ……」

「うっ、イタイとこ突かれたわ」

ああ、楽しいなあ。松ちゃん、大好き。なんて、もう

酔っ払つとるな。

女は恋をして充実すると、綺麗になる。それは本当ら

しい。その証拠に、充実しているときに悪友どもに会っ

と、すぐにそれがばれる。

「ゆづ、楽しそうやなあ」

やはり高校からの付き合いの加代子が出た。本日の参加者は、彰介と加代子、彰介と小学校からの悪友である篤。休日の、気持ちのいい昼下がりだ。

「ま、見ただけでわかるな。いつものことや。」

彰介は鼻で笑うように言った。なんやと、たれ目の脇

役顔のくせに、鼻で笑うな言っんじやああ。

「今度の彼氏ってめっちゃ男前なんやろ?」

「めっちゃかどうか知らんけど。まあ、整ってる方とち

ゃうの」

「余裕こいてんなあ。誰や、アタシは顔のええ奴は嫌い

やかめかしとったんは」

篤は呆れ顔だが、こいつも濃い顔の上、超美人の彼女

が
いるのだ。他人のことは言えまい。

「しかーし、今日はゆづだけを攻める訳にはいかんでえ。

なつ、しよーすけっさんっ」

篤がにやにや笑いながら続けたので、ゆづきも加代子

も早速話に飛びついた。

「なになに、ついに彰介にも春が!」

「それはめでたい!」

ふたりではしばし彰介を叩くと（よくある『突つつく』
なんて生ぬるいことはいらない）彰介は半ばづんざりした
ように、「あーもうやめろっ」と手を振った。

「ほれ、おきまりのこれ」

そう言いつつ、携帯を取り出した。

仲間が集まれば何かと恋人の話も出る。お互い違つ仕

事をしていてそれぞれの生活は見えず、相手の顔を見た

い見たいと（得に女組が）騒ぐので、集まるときには写真をもつてくるのが決まりになっている。近頃は、便利なカメラ付きケータイをみんな入手しているので、それで相手の顔を写してくるのだ。

「どねどね」

口づるさい女どもも、一瞬たまる。それから、口々に感想。

「いやっ綺麗やん」

「ちよつとホラ、あの人に似てへん……ほら、アメリカの女優の……」

「あ、わかるわかる、あれやろ、『スピード』に出てった……」

「サンドラ・ブロック！」

最後の一言は合唱だった。みんなそう思ったらしい。

「よう見つけてきたなあ、あんたにしては上出来やないの。合コンかあ?」

「ちやうわい」

彰介はぶすつとして言った。彰介は(そしてゆづきも)合コンが苦手なのだ。

「これは、紹介。職場の奴の。」

しばらく、彰介をつついて話に花が咲く。ゆづきも松

島の写真を見せて自慢した。

しばらく話してから、加代子が「あ、私そろそろ」と腰を上げた。

「あ、俺も」篤も立ち上がる。ゆづきと彰介も黙って椅子を立った。

方向の違う二人と分かれてから、ゆづきと彰介はゆっくり歩き始めた。今日は、もともと二人で約束していた

のだ。

「今年もそんな季節になったねえ」

毎年この時期に、一度だけ、二人は『高校生のデート』
をする。それは初めて出会った、あの高一の年、二学期
の終業式が終わったときに始まった。

その時のクラスはとても、とても楽しかった。みんな

仲良しでまとまりも良く、毎日学校に行くのが楽しみで仕方がないなんていう、今までにない素敵なクラスだった。

そんなクラスとも、今日でお別れだ。なんだかしみじみと寂しい。翌日、みんなが集まってパーティーをしよ

うという約束はしてあったが、その日は委員会の送別会など行事もあって出られないクラスメートがいるため、

特に予定もなしに下校しようとしていた。

ゆづきは軽いため息をついて、カバンに手帳を投げ込み、少しの間ぼうつとしていた。

今年一年、ほんとにいろんなことがあったなあ……

入学するときには、どんなクラスだろう、意地悪な人はいないかしら、親友と呼べる人に出会えるかしら……

など、様々な期待と不安を抱えてここに来た。ゆづきは

中学のときに、あまり友達に恵まれてなかったので、余計に不安でいっぱいだったのだ。

でも、そんな心配は一日で吹き飛んだ。彰介と出会う

たあの日から、ゆづきの一年は、多少の辛いことはあっても、いいこと続きだったと思える。そんなことを・・・

つらつらと考えながら、ぼんやりと黒板を眺めていた。

そうしたら、彰介がふらりとやってきて、「じつ言った

のだ。

「ゆづ、ひとつ頼みがあんねんけど」

ゆづきはほつつと顔を上げた。「何？」

「あんな」彰介はガラにもなく、少しばかり照れ笑いをした。「散歩、付き合って欲しいねん」

「散歩？」

「そつ、散歩」

「ええよ」

ゆづきはあつさり言った。とにかく寂しい気持ちを、

暖かい方向へ持つていきたかった。彰介と一緒になら、な

おいしい。入学からの一年足らずで、二人は本当に大事な仲間になっていたのだ。

どこへ行くともなくぶらぶらと二人で歩く。春先にふ

さわしい、のどかなお天気。暖かな陽の光がどんなにか

優しく二人を包んだことだろう。

坂を下り、閑静な住宅街を抜ける途中、小学校がある。

その校庭から、塀を越えて、それは見事な桜が道路にまで突き出していた。

二人は思わず足を止めた。ゆづきたちの学校にも桜は

あつたし、この先をもう少し行けば近所の人たちがたく

さん集まる、桜の綺麗な公園もある。だが、人々が通り

過ぎてゆく道の上に、こんなに見事な桜が咲いていても、
なかなか一人では足を止めてゆっくり見上げることなど
ない。

まるでデートみたいに、二人で歩いていたら、不自
然さもなく立ち止まることが出来た。そのことが、一瞬
にして二人の心に理解できたのだ。

「・・・別に、何か用事があるわけやないねん」

彰介が言った。

「俺な、『高校生のデート』みたいなの、してみたかってん」

ゆづきは桜に見入りながら呟いた。

「何やその、『高校生のデート』って」

「せやから……マンガとかに出てくるやん、高校生が学校帰りとかに、二人で並んで歩くっての。それ、それ

がしたかったんや」

「何や、そんなことか」

ゆづきは振り返った。彰介つて、ちよつと昔のセンチメンタルなマンガが好きなんやっただな。なんだか彰介が可愛らしくなってきた、思わず笑った。

「ほんなら、ほれ、手エもつなごうか」

ゆづきが彰介の手を取った。あつたかい。

「ま、年度末出血大サービスってところかな」

「サービス言うな。商売女みたいや」

「しっつれいねっ、付き合つて欲しい言つたん、どこのどいつや」

そのまましばらく桜を見ていた。ぽかぽかと暖かい日

差しの中でほんのりピンク色の桜、こんなにやわらかく

て綺麗な桜は初めて見たと、そのときゆづきはほんとう

にそう思ったのだ。

次の年もまた次の年も、桜の時期になると彰介はゆづきに「散歩」と言ってきた。そしてそれは毎年の恒例行事になってしまった。

これだけは、ふたりだけの行事だった。初めてそうしたときから、これは『高校生のデート』だったのだから。

章介の憧れた昔のマンガのように、二人だけでゆっくり歩いていくものなのだから。

それは桜の魔法だったのだろう。あ那时的桜はあまりにも優しく、美しく、その後辛いことがあったときにも一番に思い出しては心を癒す事のできる、大切な情景になってしまったのだ。そしてそれは思っていた以上に、二人にとって宝物のひとつになっていた。だから

翌年、彰介が「散歩」と言ったとき、ゆづきはすぐに承知したのだ。

毎年、それは二人の心の拠りどころのように繰り返された。そして今年も・・・もう、何も言わなくてもそれは「約束」されていたのだった。

小学校までの道のり、映画の話などつつらつつらしながら、

二人はゆっくり歩いた。今日もいい天気だ。しばらくだ

らだらと坂を登って、小学校の角を曲がったらあの桜だ。

毎年その角を曲がるとき、ちよっどどきどきする。今

年はあまり咲いてなかったらどうしよう。もし、かなり

散っちゃっていたら？　いつも「大体今頃かな」という

見当をつけて来るので、一度ばかり、今ひとつ満足でき

ない咲き具合だったことがあったのだ。それ以来、角を

曲がる瞬間に緊張してしまふ。

今年の桜は、……いい桜だった。あのときの桜のよう
に、優しく、誇らしげに、けれど当たり前前にそこに立つ
ていた。

角を曲がると、手をつなぐ。それから黙って、桜を見
上げた。

いつもの……いつものことなのに……ゆづきはふ
と、思ってしまった。一体こんなこと、いつまで出来る

んやろう、って。

あの時の桜から数えて、今年で十二回目の桜だ。壬支で言ひよ一回りしてしまつた。だらだらと、年齢ばかり重ねていつて、私たちはいつまでも変わらないと思つていても、私たちを取り巻くものたちは少しずつ変わつていつてしまふ。

結婚もするだろう。子供も生まれるだろう。そつなつ

たら、こんな『高校生のデート』なんて続けていけるだ
ろっか？ どちらかの、もしくは両方の相手が嫌だと言
ったら？ 嫌と言っに決まってる。自分だったら、そん
なのは嫌だ。だったら・・・

「今年も咲いてて、良かったな」

彰介の言葉が、ひどく寂しい響きでゆづきの胸にこた
えた。なんだか、これで最後だと言っているような気が

して。ゆづきと同じことを彰介も考えていて、いい加減見切りをつけようと言い出しそうなのがして。そんなことを言われたら、……ゆづきは泣いてしまいそうなのがする。

……でも彰介は、そのまま呑気な口調で話をする。

「あ、そうじゃ、うちのおかんが」

「わかった」

「・・・お前・・・人の話をさえぎんなや」

「だってわかるもん。いつものことやし。そろそろやと
思っとったし」

ゆづきは可笑しそうにくすくす笑う。

彰介の母は世話好きだ。八年前、ゆづきの両親が転勤
で大阪を離れてから、ずっと定期的にゆづきを夕食によ

んでくれる。

これには伏線があつて、ゆづきの母と彰介の母が親しくしていたからなのだ。しかしそれは、ゆづきと彰介の気配りあつてこそと言えた。というのも、ゆづきの一家は、ゆづきの高校入学の半年前に大阪に引っ越してきたばかりだったのだが、転勤で初めての土地に来ると、多少引つ込み思案のゆづきの母は、なかなか友達を作れず

に寂しそうにしていることが多い。子供が小さいころは、子供を通じて学校や地域で友達を作ることにも出来るが、越してきたばかりの頃は受験や何やらでバタバタしている、たし、娘が高校生にもなれば、そういう機会もなく家にこもりがちだ。

そこでゆづきは何か習い事でもしてみたら、と提案した。だが知らない土地ではどこを探しに行ったらいいか

も心もとない。そのことを彰介に相談したら、あっさり
応えてくれたのだ。

「おう、うちのおかんが梅田の教室に行つとるで。編み
物やったかな。えらい楽しそうやし、そこ紹介したつた
らええわ」

そんなわけで、ゆづきの母と彰介の母はすぐに親しく
なつた。章介の母は賑やかでムードメーカー的存在、ゆ

づきの母は一件大人しそうだが内弁慶。その上、二人とも酒に強かった。いずれの父親もあまり飲まないのに、妻である自分たちは酒好きという、あまり大きな声では言えない悩みを共有したものだから、そりゃもう俄然気が合ってしまった。

これにはゆづきも彰介も大笑だった。普段家で母親のぼやきを聞いているだけに、いやあ仲間がおってよか

ったよかった、と思ったわけだ。

ゆづきも彰介の家に遊びに行ったこともあって、彰介の母とはすぐに仲良くなった。彰介母は、ゆづきも酒豪になるであろうことまで見抜いていて、やがて晩酌のお供までおおせつかるようになった。大学三年の時にゆづきの父の転勤が決まり、ゆづきが一人で大阪に残ることになったとき、ゆづきの母はくれぐれも娘を頼むと彰介

母に頼み込んだのだつた。

「また飲まされるなあ」

「じゃあないやん、それが楽しみで呼ぶようなもんや」

「あんたの兄ちゃんも飲まへんもんなあ。また三人で居

間のコタツで夜明かし……てのは困るけど」

「ま、適度に覚悟しときや。いつやったらええ？」

「……水曜 かなあ……水曜にしといて」

「わかった」

駅に着いたら、魔法は解ける。手を離して、その手を振る。ばいばい、またね。ほな、水曜日に。

(づづく)

編集後記

春になった。定期ローテーションと称して、6人連れて行かれた。入って来たのは、実質1人だった。去年は、育休で二人抜けて一人退職した後、定期ローテで3人連れて行かれて、誰もこなかった。文句を言ったら、新人が1人来た。さあ、何人になったでしょう。

小学生の算数の問題のようだぞ？

今年は、文句を言おうにも課長も部長も異動だった。

バカやろおおおお〜!!!

「おや、まあ。それはちとあんまりかも……。」

リフレッシュ休暇で遊びに行きたいのにいいい!

「やっぱり、自分が遊びたいだけだな。」

いいじゃないかああああ〜!!!

(紅)

早くも台風が日本に上陸しました。台風通過の宮崎からです。転勤ではるかかなたに来てしまいました。ぬくいです。湿っぽいです。海が近くて山が近くて、虫が多くて鳥がなつこいです。映画館、ないです。先日ははるばる県庁所在地まで映画を見に行ってきました。特急で1時間半かかります。1日仕事です。電車、単線です。

1時間に1〜2本です。それにしてもTV番組が少ないぞ。月9のドラマが…アニメが…ご当地番組に食われておる。その上放送半年近くも遅れてるし……

ま、なにはともあれPDF版4号目、53号も無事発刊です。

(翼)

今年は梅雨のはしりみたいな天気が多くて、気持ちまで陰気になってしまいました。からっと晴れた日には何だか陽気になっちゃって、ほんとに単純なつくりのわたくし。

それにしてもジエイスン・ステイサムです。もうめちやくちや好きです。もうすぐDVDがまた出ます。欲しくってたまりません。毎日観てぐふぐふ笑ってしまつと思

います。そんなささやかな幸せで日々を乗り切る・・・

主婦37歳 これでもいいのかのあゝ

(猫)

EOF

